

1945.8.15 敗戦の日が思い出される

『日輪の遺産』の映画を見て

2011年。一人の老婦人が、戦時下のある思い出を家族に語り始める。それは、帝国陸軍がマッカーサーより奪取した時価200兆円にも及ぶ財宝にまつわる、驚愕の真実であった。しかしその裏には、わずか20名の少女達と、軍の密命を守り抜いた将校達の、祖国復興を願った壮絶なるドラマでした。

私は、丁度この頃20名の女子学生方と同じような環境での学生生活をしてきたため、下記の多摩方面モデル地域を考えながら、六十数年前が思い浮かべられたのです。（下線のある青字部分を[クリック](#)して下さい、詳細が表示）

- [稲城市](#) - 本作品の舞台となった武蔵小玉市のモデル。
- [多摩サービス補助施設](#) - 東京都稲城市および多摩市にまたがる米軍施設。かつての陸軍多摩火工廠で、本作品に登場する「米軍南多摩キャンプ」のモデル。
- [稲城市立病院](#) - 丹羽が海老沢や金原と出会った武蔵小玉市立病院のモデル。多摩サービス補助施設に隣接している。
- [堀越高等学校](#) - 前身である堀越高等女学校が、作中の女学校のモデルとなった。

さらに、次の「[天声人語](#)」を読み、考えが深まっていきました。

2011・8・14 朝日新聞 「天声人語」より

作家の田辺聖子さん（83）は、玉音放送を一家で聴いた。「降伏したみたいなこと、いうてはる」と父。「フシが、なさけなさそうですね」と母が頷く。大人の脱力ぶりに呆れ、17歳の軍国少女は一人、無念を日記にぶつけた。（回想『欲しがりません、勝つまでは』）

▼66年前のきょう、日本はポツダム宣言受諾を連合国側に伝えた。深夜に録音された終戦の詔書が、翌15日昼、NHKラジオで流される。大衆が初めて聴く

陛下の声だった。漢語の多用と雑音で、すぐには解せぬ人も多かった。

▼野坂昭如さん（80）はそれでも、終わったと感じた。もう空襲はないと思うだけで、体の芯がとろけるような安堵を覚えたという。終戦の日、どこで何を思ったか、百人に百の話があった。

▼各人に語るべきものがある大震災も、時代を画す共通体験に違いない。すべきことが山とあるのは敗戦時と同じだが、私たちに高揚はない。虚脱のいとま暇もない。津波、原発にとどまらず、**日本は複合的な不全の中**にある。

▼ひと声で動く世でもなし、**堪え難きを堪え、忍び難きを忍び**、不全の理由を一つずつ取り除いていくしかない。より生きやすい国を目ざして、まずは荒れ放題の政治と財政から手をつけたい。

▼NHK 放送博物館の「玉音盤」は窒素ガスの中で眠る。今に残る音源は、傷む前のレコード盤から占領軍が複製したものだ。米国は「多くの命を救った放送」に価値を認めた。

生かされた人々は驚異の復興を成し遂げる。もう一度できないはずがない。